

不明な繪は説明をもとめる

亮之勝永家



とであつた。こんな場合には子供は心の中の恐怖感の感情を表現するものが出来なうで、幽霊のようなものゝか或は蛇とかお化けとなす描いて心の中の恐怖感を吐き出すのである。

しかしそれも描寫者が平生心の
中を自由に表現するように指導を
していなければならぬ。「こん
なわけのわからぬ圖を描いて」な
ど叱つてゐると子供は自分の心
を閉ざしてゐなくなつてしまふ
子供が自分の圖に描いたことがら
を話すように仕向けてゆくことが
大切である。北川民次郎重國の
本に書いてあるが、中學二年の男
の子に何か怒(こわ)いものゝ描
いてごらんといつたら鬼の圖を描
いた。その次もまたその次もとい
つたぐあひに續けて四五回も描い
ていた頃にお母さんが或る日訪問
したので、それを見せるとびつくり
して中學生にもなつてこんなバ
カな圖を描くと悲しむのです。そ
こで北川さんは、子供は何でも自
由に描くように解放してやるとい

て行くのであるが、家で考へてい
るうちに、やつぱり自分が日頃あ
んまり口やかましう欠点ばかりを
腹そうと思つて叱つてゐるので子
供は自分を鬼のように思ふのかも
知れないと反省して、それから少
しつやさしくするようにしてい
ると、それまでは子供は夜になる
と中學二年にもなるのに便所がこ
わくて行けなかつたのがいつのま
にか自然と行けるようになつたの
だそうである。諏訪校には精神薄
弱兒を招めた特殊學級があつた
現在の先生の前の受持ちであつた
津留先生のときにごの教諭にとま
どき行つてみたことがあるが此の
圖などはいづれ何枚かつづは弄わ
れてゐたようである。また或る本
には四年生の子供が櫛や鉄
砲などで廢物を浪泊している圖を

外山あきら

よく描くので、先生がその子に一番嬉しい人は誰かと聞くところ座に
お父さんと答えた。こういうことが
書いてあつたが、この場合の怪物
はお父さんであつて自分がそれぞ
やつつけているのだらう。だから
この子にはすでに父親に対する反
抗の心が芽を出しているのである
以上のような間に共通した特徴
は、黒とか茶色とかきたない
黄色とかドロドロした土色などの
ような色が多くて縞づかいが乱雑

外山

姉のとよ子が呼びに来た時は、六回裏の勝治連の攻撃で、六対四で負けているときだった。勝治は「うん」と返事をしただけで帰る様子がなかった。とよ子も丁度近所の友達が居あわせたので、その人と歸込んでしまった。ひとしきり語が済んだときは、もう勝治のチームは十二対四と大きく引き離されていた。

父が四月月前病死してからは、母のサキが入替採用で日辰炭に勤めるようになり、姉は高校を中退するとそのまま家事の方をすることになり、そのあい間に近所で洋服を賣っていた。

勝治は中学一年生になったばかりだった。夕食が丁度済んだとき父の同僚だった安太さんがやつて来た。

「勝ちちゃん、ごはんだつてば」
「うーん。俺めしを食つて来る」と勝治が云うと、それをしおに外の少年連も帰りに仕腰をはじめた。母と如と勝治の夕食がはじまつた。

「勝ちちゃん、今日はてんこてんに負けとつたぢやないか」と、野塚好吉の玄玄さんは細い目を一そう細くして上りこんできた。母は玄さんと向いあつてすわつた。姉は

いる。それはチリや雨にまじつて土にたまり、米や野菜に入り人間の口から入ってくる。愚を吸うとき卵からも入ってくる。体に入つたストロンチウム90は骨に落ちていて白血病やガンを起す。



(写真は女)

広島の被爆者で首のケロイドがガンになり、死を待つ人も出てきた一番恐ろしいのは子孫が死に絶えたり、奇形児が生れる遺伝の問題だ

放射能を受けた卵から二つ頭の金

世界は
恐怖する

記録映画の第一人者とされている
亀井文夫監督作品。原水爆実験が
気には死の灰がますます増えてい

離れ出す「死の灰の怒るべき異体」を伝える全九巻・一時閨半の長編である。熱帯魚が生命を次の世に伝えるための営みを続けている。一方で二羽の小鳥が放射能を受けて生命を落している。

であるのが普通であつて、黄や桃色などの美しい愛情を表わす色がないのでそのままで生長すると劣等感の強い子になつたりひねくれ者になつたり反抗的な不良になるのである。（筆者は教研顧問）

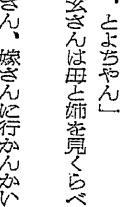
と共同の机に向つた。

小刀が見当らないのでそこら辺を捜すうち、姉のスタイルブックの中に手紙を見つけた。要を返すと晴夫青年からで、姉あてになつてゐた。

あきら

中学生の勝治には警悪の判断など見極める暇はなかつた。すばやく跳いて読みはじめた。きれいな字で所々むづかしい漢字が重なり

勝治は何も事新しく話すこともなかつたので、腹はいになつてタ刊をひろげた。ひとしきり世話のない話が済むと、姉が母の横に座るのを待つてたように「なー、とちやん」と、玄さんは母と姉を見くらべながら「お前さん、嫁さんに行かんかい」と



と元駝ともつかぬ口振りで話かけた。

「まあ、玄さんなら、あんたこの娘はまな子供ばいた、それにもうてくれることがあればつすんな



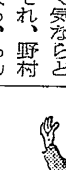
「そりやあ、嫁に行く気ならどしどしでんあるばいた、それ、野村さんな俺んそこにより来る、あん人の一番下の弟さんたい」

「野村さんにはそけん人がまだ居たとかいた」

「何んでも二十六で親塾ではたい」

こへ突き飛ばされていた。
「やつたな、こゝろ」

勝治にむらむらと闘志が湧いた

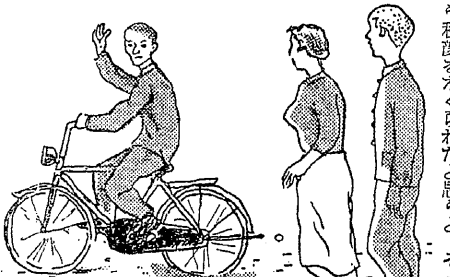
A black and white illustration of a man riding a bicycle. He is wearing a dark jacket and light-colored pants. He is looking back over his shoulder with a determined or angry expression. The bicycle is a standard diamond-frame model with a rear rack. The background is plain white.

「したもんげな」
と姉に念を押すように話した。
野村さんは玄さんと同寮生で、H
旅館にもう三十年も勤めている人
で、父がまだ元気なときは、一二
姉をじらしてみたい闘志だった、
もう久しく姉と争った事がなかつ
たから、そんな気持ちになってい
た。飛びかかつて行くと、姉は必
死になつて手紙を抱いていたが勝

母も全然知らない人ではなかった
その野村さんの末弟で晴夫青年は
日成炭の傍係会社で日製塩工場に
簡単に手紙は奪われた勝治は高く
手を差し上げて誓のびまでして読
んだ。姉はそうさせまいとその手

勤めてゐる人だつた。勝治は降つて勇へをよむ。師の豪炎がほかにさういふ手へ手に入るといふ

「勝ちゃん、止めて、止めて、勝ちゃん、勝ちゃん」
勝治はそれが一そう面白かつた。遂には
「貴方にほくの希望をくんで下さ



と厲を出して読みはじめた。姉は狂氣のようにすがつてきたが、そのうち勝治の足元へ墜りこむと身体を丸くして泣き出した。いつもこんな事をして姉を泣かした小さい時のころを思い出して、勝治

「そりやくちやん行かんて、行けばさう判るたい、尸骸鉢のすぐそばじゃん」

と母がせきたてた。

「姉ちゃん、俺も行くよ」

勝治は昨日の償いのつもりだつ

は、泣きながらむかつかつてくる姉を待っていた。だが姉は昔のように立上つては来なかつた。いつそはぐしく泣いてゐた。

「どうしたんだい、姉ちゃん、姉ちゃん」

「十度学校も休校だし都合がいいや」

半分は自分云い聞かせた。

「そうしてくればとよ子も大助りや、とよ子、勝治が行つて来れや」

姉は身体ごとくいやいやおして見せた。

「姉ちゃんごめんよ、ごめんよ」
自分の一番大切なものが壊れて

「ええ、行つて見るわ」

「俺も二番方だし、一足先に自転車で行つとくからね、後から来るな

行くよな氣持になつた勝治は手紙を姉の胸の中に押し込んでやつた、その手を姉の涙がぬらした。

「姉ちゃん」

勝治は姉と同じ恰好で、姉の顔をのぞきこんだ。姉は一そうはげしく泣き出した。

「姉ちゃんごめんよ、俺はただ俺は……」

言葉が書にならなかつた。

とよ子は勝治と七時半の通勤電車に乗りつて行く事になつた。

「姉ちゃん、俺な、晴夫さんに何て云つたらいいのかな」

「何も云わなくていいわ、お見舞に来ましてつて云うだけよ」

「変じゃないかな、俺晴夫さんと」

とよ子は勝治と七時半の通勤電車に乗りつて行く事になつた。

「姉ちゃん、俺な、晴夫さんに何て云つたらいいのかな」

「何も云わなくていいわ、お見舞に来ましてつて云うだけよ」

「変じゃないかな、俺晴夫さんと」

で勝治の目から大粒の涙が流れていった。

翌朝、勝治が眼をさますと、母も姉ももう起きていて、郵便の中へ

は初めて会うんだぜ、兄さんて呼ぶのかい」

「嫌だわ、勝治のたら」

姉はぼ—つと赤くなつた。停車場へ降りるだらだら坂を半分降り

「早く顔を洗つておろせよ」と云つた。その一言で勝治は元氣よく蒲団をかけるや井戸端へ立つてうへへのはなはなと洗つた。

「早く来いよ」

文吉さんは片手を一寸振つてみせると出勤する人達の中へ混えて行つた。

昨日断んた如へんの手紙では、もう吉野の日本は夢であらうと「市

「お早う。朝早くからでけど、とよちゃん、曙夫妻が昨日会社で騒
ぎさんが来たのはそれから間も
なくだった。」

「病後の目まで腫れてまへな一姉
さんはきつと楽しいんだろうな」
そんな気持で今日をみると、いつも
の姉と違って今日の姉はきれいだ
った。髪がもうそこまでやってく
てゐる。風の旗としてひらひらあつ

「うん、怪我は大した事はないんだ」

「まあ、それで」

「異平」

たか 如夢の空間にとびくると合
つていた。

野間 宏

「どうも……」
「足だけどな、まあ二、三週間は人つとらんと出来んげなたい。そいいでとちやん見舞に行つて来るどよかはつてんね」
「ええ、そりや行きますけど、う

「姉姉」(外山あきら)
結婚して行く姉に対する少年の淡いしつと哀しみや祝福のいりまじつた感情が描き出されている姉に手紙を奪われて、どうしてもそれが取返せなかつたとき、以前

ありあけ俳句会では俳句感
寺望の句会を来る二十三

○ 四山鉦友会クラブ階上で
するが当日は颯目風景五句
句、河野靜露氏が選にあた
なお会費は三十円で、入
は会費納入者のみとのこと
二月九日 大谷地域分會写
ークルは恒例の写真展示会
谷マリーケツト前の通路で行

【課題】新年雑詠
高

雲家子亭で暇やう冬木みの川淀み見つけて釣る魚
犬

四季
も雪その下も雪梨の園
みの
一羽元朝の空飛び続け

蘇注ぎつ眞赤な父の顔ま
 隆
 災告げ繰込む寒の声きびし
 孝

静 櫻を渡る雲やがて月ばかり
 青 人どの火障子に映る夕顔か
 濁 八 コ掲げて御親の愛の雲井ま
 八 ソの酔妻と分ちて平和なる

十路立つ雑煮の祝い喉つま
彩秋
近の石炭初荷の船に積まれ
樹
と冬へ飛び出す子等寝着の

鳥籠おろし忘れて除夜過ぐ
春

三根

改る一瞬太き吐息中
 夢子
 おやきて狂女飛雪を肩に溜
 津根